

修士論文（要旨）

2014年1月

日本語学校で学ぶ中国人留学生の日本語学習
一言語の学習・使用環境と学習動機に着目して—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

212J3019

楊 ヨウ

目 次

第1章 はじめに	
1.1 研究背景	1
1.2 研究目的	2
1.3 在日中国人留学生の現状	3
第2章 先行研究	
2.1 用語の定義	4
2.2 第二言語学習における学習動機研究	4
2.3 日本語教育における学習動機研究	7
第3章 調査概要	
3.1 調査対象	9
3.2 調査方法	9
3.3 分析方法と枠組み	10
3.1.1 分析方法	10
3.1.2 分析枠組み	11
第4章 調査結果と分析	
4.1 アンケート調査結果と分析	13
4.1.1 調査協力者の学習動機について	13
4.1.2 学習動機に対する気づき	15
4.2 インタビュー調査結果と分析	16
4.2.1 CF1の学習動機とその分析	17
4.2.2 CF2の学習動機とその分析	21
4.2.3 CF2の学習動機とその分析	27
4.2.4 CM1の学習動機とその分析	33
4.2.5 CM2の学習動機とその分析	38
4.2.6 CM3の学習動機とその分析	44
第5章 総合的考察	
5.1 言語環境と学習環境による学習動機の変化	51
5.1.1 JFL環境での「周辺の動機」と「中心的動機」	51
5.1.2 JFL環境からJSL環境への移動による「周辺の動機」の多様化	53
5.2 学習者の学習動機の変化への捉え方	54
第6章 まとめと今後の課題	
6.1 まとめ	57
6.2 今後の課題	58

謝辞

参考文献

巻末資料

【キーワード: 周辺の動機、中心的動機、言語・学習環境、学習リソース、
アイデンティティ】

要旨

日本に滞在する外国人留学生の数が増えている現在、留学生たちは単に教室内で学習するだけではなく、アルバイト、進学、就職などの実生活と関わり、教室外で様々な異文化接触を経験していると考えられる。本研究は、日本に移動した日本語学習者の学習動機は言語・学習環境の変化と異文化接触の体験にどのように影響されるかを社会的文脈に沿った視点から、分析・考察することを目的とした。具体的に、次の2点を研究課題とした。

(1) 母国と日本で学習経験を持つ学習者の学習動機は言語・学習環境の変化にどのような影響を受けるのか。(2) 学習者自身が自分の学習動機とその変化をどのように意識し、捉えているのか。

本研究は、都内のW日本語学校の上級学習者を対象とし、アンケート調査とライフストーリー・インタビューを実施した。アンケート調査協力者は40名であり、その中の6名をインタビュー調査協力者とした。調査協力者は日本に滞在しており、教室以外の多様な場面で日本語を学習・使用していると考えられるため、三矢(2000)の学習動機の分類に加え、Williams & Burden(1997)を援用して新たな枠組みを作成し、データを分析・考察した。

アンケート調査結果から、まず、調査協力者の学習動機について、以下の特徴が明らかになった。①漠然とした目的で来日した学習者が多い。②「強引動機づけ」で日本語を学習し始めた中国人学習者が少なくない。③JSL環境に移動しても、社会的リソースを活用せず、独習を堅持する学習者がいる。④在日中国人留学生間のネットワーク構築にも問題がある。次に、学習動機への気づきについてであるが、学習動機を意識したのは、他人の影響により自尊感情を感じた時と、自分に対する期待と将来への不安がある時であった。さらに、母国より日本ででの出来事に学習動機への気づきがより強かったことも分かった。

インタビュー調査結果によって、研究課題(1)については、学習者は所属している言語・学習環境により「周辺の動機」が変化すること、また「中心的動機」が「周辺の動機」に影響されて多様に変化することが明らかになった。JFL環境においては、「周辺の動機」がポジティブな影響だけでなく、同時にネガティブな影響を持ちながら「中心的動機」に影響を与えることが明らかになった。一方、JSL環境の場合、「周辺の動機」がより多様かつ複雑であり、学習者がその変化をどの程度受け止められるかにより「中心的動機」にポジティブ或いはネガティブな影響を及ぼしている。研究課題(2)については、JFL環境からJSL環境への移動がもたらす学習動機の変化に対する捉え方が、学習者個人の心理的タイプや学習者の自己認識と関係していることがわかった。自分の世界に閉じ込めり自分で問題を解決することを好む学習者と比べ、周囲の他者と環境との接触を好む学習者のほうが移動に伴う学習動機の変化を、より積極的かつ主体的に捉える傾向がある。また、JSL環境においては、学習者は単なる「学習者」ではなく、同時に「従業員」、「在日中国人」などの多様なアイデンティティを持っている。学習者は自分を取り巻くJSLという言語環境との相互作用によるアイデンティティの重層化を経験し、それが個人の成長を促すことで、自分の学習動機に対する捉え方が変わることが示唆された。つまり、学習動機のダイナミックな変化が、学習者自身の自己成長を多角的に促していると言える。

以上の結果から、JFLの学習者はテストや大規模公開試験などの短期的な学習目標だけでなく、より長期的な学習目標を設定する意識を持つ必要がある。また、JFL環境で学習者を取り巻く学習環境が主に教室と学校であるため、JFLの教師は客観的かつ社会的な視点から日本語能力試験を捉える必要があり、学習者に適切な情報を与えるべきである。さらに、日本へ留学を志望する学習者は、移動する前に明確な目標を持つとともに必要な情報を収集することが留学を成功させる第一歩であると考えられる。さらに、JSL環境への不適應の改善には、移動後の初期段階にまず、自国人のネットワークを構築することによってJSLという社会的環境に円滑に適應できる方策を試用することが有効であった。

本研究は、調査協力者に一回のみのインタビューを実施した。今後、学習動機の変化をよりよく把握できるように縦断的かつ長期的にデータを収集して研究を行う必要があると考えられる。さらに、今回の調査結果から、2人の調査協力者が大学院に進学した後の学習を通して、日本語学習に対する態度と認識の変化により学習動機も変わるという結果も得た。このことから今後の課題として、続いて大学院に進学した後の学習者の学習動機の変容についても調査を深めることが重要であると考えられる。

参考文献:

- 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る—」『言語と文化』12, 39, 59-77
- 佐伯胖・藤田英典・佐藤学 編 (1995) 『学びへの誘い』東京大学出版社
- 河合隼雄 (1994) 『ユングの心理学入門』岩波書店
- 窪田光男 (2005) 『第二言語習得とアイデンティティ—社会言語学的適切性習得のエスノグラフィ的ディスコース分析—』ひつじ書房
- 小西正恵 (2006) 「3. 動機・態度」津田塾大学言語文化研究所言語学習の個別性研究グループ編『第二言語学習と個別性—ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—』春風社, 92-108
- 桜井厚 (2002) 「インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—」せりか書房
- 長嶺倫子 (2011) 「言語教育において『自分史を書く』ことの意義—アイデンティティ形成の視点から」細川英雄編『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性—』春風社, 179-201
- 長沼君主 (2003) 「言語学習における社会的文脈と動機づけ」『心理学評論』46 巻 3 号, 108-120
- 三矢真由美 (2000) 「能動的な教室活動は学習動機を高めるか」『日本語教育』103, 1-10
- 宮副ウォン裕子 (2006) 「日本語能力試験の波及効果—香港の調査から—」国立国語研究所編『世界の言語テスト』くろしお出版 227-250
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向: 第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として (第 6 章 言語学習と動機づけ)」『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線: あすの日本語教育への道しるべ』2002, 315-329
- 守谷智美 (2004) 「日本語学習の動機づけに関する探究的研究—学習成果の原因帰属を手がかりとして—」『日本語教育』120, 73-82
- 徳田治子 (2004) 「ライフストーリーインタビュー」無藤隆 他編『質的心理学—創造的に活用するコツ—』新曜社
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部
- パトリシア・A・クラントン 著 入江直子他 訳 (2010) 「おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして—」鳳書房
- 羅曉勤 (2005) 「ライフストーリー・インタビューによる外国語学習動機に関する—考察—台湾における日本語学習者を対象に—」『外国語教育学会紀要』8, 38-54
- 羅曉勤 (2010) 「教育心理学における研究パラダイムの再考—学習動機研究を中心に—」『淡江外語論叢』12 月号, NO. 16, 96-118
- 李受香 (2003) 「第 2 言語および外国語としての日本語学習における動機付けの比較—韓国人日本語学習者を対象として—」『世界の日本語教育』13, 75-92
- Williams, M., & Burden, R. (1997) *Psychology for language teachers: A social constructivist approach*, Cambridge: Cambridge University Press.